

「さくらの姫君」「住吉物語」など

— 國學院大學図書館蔵善本解題Ⅲ —

徳江元正

〔一〕

本学図書館には、江戸極初期の写と考えられる奈良絵本が一かたまりある。別に、寛文期の写と目される奈良絵本も架蔵されている。また、大型本の「ものくさ太郎」と「さくらの姫君」も蔵されている。一群の横本の奈良絵本諸本に着手する前に、まず孤本とおぼしき「さくらの姫君」を扱ってみる。

五 「さくらの姫君」(仮題) 一冊

本書は、縦凡二六・二纏、横凡二〇・二纏、袋綴一冊、表紙雲紙、左肩上に題簽(縦凡五・三纏、横凡一・八纏)を貼った痕が認められる。朱の綴糸は後補、表紙・本文用紙とも裏打が施され、多少汚損、ただし本文の解読に差し支えるほどではない。内題なく、全十四丁の半分以上が絵で埋められており、その絵はかなり精密でしかも古風である。表紙・見返しにも画面にも、金箔・銀箔は一切用いていない。画面に詞章を書き込んだ箇所も少くない。一面の行数不定、画面は、天地をすやり霞で区切り、それに墨の描線のみで雲を添えている。

本書は異類物の一つ、草木の精たちがさくらの姫君に懸想をする、その懸想文と恋の和歌とを中心にして展開する、単純な筋の短篇である。目下のところ、孤本としてよからう。松本隆信氏篇「増訂室町時代物語類現在本簡明目録」にも記載なく、注意はしているが、伝本の他に存するをいまだ知らない。

本文一丁表を引用してみると、

なか比の事かとよ　よし野山の「」にすむ／人あり　さくらのひめ君とてみめかたちまことに／いつくしくこゝろさまよしありて何事にいたる／まてたをやかに御かたちめてたく物二たとふ／れはいにしへのやうきひりふしんもかくやと／思ひやられたり

と六行にわたり書き記され、あとの五・六行は余白のままで、二丁裏と三丁表とが見開きの画面をなしている。

右にいったいに屋形と椽とを画き、蔀・簾、几帳・屏風また板戸のしつらえで、廊に三人の女房たち、屋内になかば几帳にかくれて、姫君とおぼしき女性が居る。左は桜の大樹をいったいに画き、満開のてい、鳴子を掛け、鳥どもが飛び交い、庭上には三人の童女、手前の池水には鴛鴦が五羽浮かび、上・下はともにすやり霞で区切り、雲形もみられる。几帳・屏風、女房の装束などに金泥を用いている。

この姫君に、「四方の花ども」が、思い思いの歌に託して懸想をする。まず、「山吹の官人」^{くわんにん}が、萌黄重ねの薄様にこま／＼と書いた文に一首添え、姫君の乳人^{めのと}「かすみの小宰相」の手を経て参らす。

さかりなる花のすかたをみしよりも／こゝろそまとふきゝのふしきき

姫君は小宰相に相談した挙句、「よしある人なれともとしをひたるもうるさし」とて、返歌に一首、まことなるこゝろのいろをしらせても／何ニかわせんをいの山ふき

以下、「藤浪の藤宰相殿」^{とう}から、

つゝめともたえぬ思ひになりぬれば／身もなけつへしいけのふちなミ

姫君の返し、

むらさきの／たえぬ思ひに／なりぬとも／つるの／あふせは／あらし／とそ／おもふ

次に、「れんげつゝじのいわの房」から、志賀寺の上人のためしをひいて、一首、

あわれとも／君に／みせはや／人しれす／かゝる恋ちに／まよふ／こゝろ／は

姫君は、「しゅつけの身としてかゝること葉いふにくさよ」とて、急ぎ文を返される。

次に、「つわきの大なこん殿」から、

人しれぬかゝる恋ちにまよふ身を／あわれとせめてとふ人もかな

姫君、「この大なこんとはさは／＼とはおわすれともいとふとくしんけにてましますもうるさし」とて、

とへかしと思ふこゝろの玉つさを／たれかあわれと思ひやらまし

次に、「あをやきのせうしやうとの」から、

さかりなる花のこゝろのまとわれて／思ひみたるゝあをやきのいと

姫君、「せうしやうとのハしんしやうにやさしくおわすれともいとみたれかゝるもすこければ」とて、

あをやきの／思ひみたれて／何かせん／いとかす／ならぬ／わか身／なり／しを

次に、「卯の花のしきふの允殿」から、

かすならぬ／我身の／ほとを／思ひしれ／さても／やむへき／□にあらねは

姫君、「いろしろくあひきやうもなくをハします」とて、

卯の花の数にもあらぬ／身二ありて／をよハぬ枝も心かくらむ

次に、「かいての薦のかみ」から、紅葉重ねの薄様に文を書き、それに添えて、

秋ならて色にもいてぬ身なれ共／□□ゆへいまそもみちしにけり

姫君、「いろふかくやさをとこにておハすれともあきならてハ人にもてなされたまはぬ身なれは」とて、

秋ならて／人にも／しれぬ／身に／ありて／何しに／今は／もみち／しぬらん

次に、その名聞こえたる「からさきの松のせうなこんとの」から、

たまはこの道もはるかにへたつれとも／こゝろのうちを思ひしれ君

姫君、「めいしよの人にてましませともかすかなる御すまいにてしほさへやかぬうらさひしきおもハしう候ハす」とて、

はる／くと／よしの、／山に／すむはなを／さひしき／浦の／松は／こふらむ

こゝに、「いえこうはいの左中将との」とて、かたちもいつくしくこの世の人とも覚えぬ方が、「あはれ、いかなるついでもがなしのびてみばや」と思召し、ある暮れ方にかの御所へ立ち入り、姫君を見染める。

——そのころ御とし十八に／ならせたまふ 其御しやうそくにからくれなひのさし／ぬきにうすくれなひの御ひたゝれつまくれなひの／あふきにやうちやうそへてさしたまふ ひめ君のすミ／かへたち入給ふにいかなるせんせの契りやふかゝりけん／その折ふしひめ君ゆふつく夜物あわれなるにはし／ちかくいて月をなかめ給ふ としの程十四五ハかりにて／御かたちたとへんかたそなかりけり さ申しやうかすミの／たえまにかくれてみ給ふもつゝミかたくをほしめせ／ともさよふけぬれはかへりぬ

通わす文積つて、遂に左中将は姫君と逢う瀬の仲となる。日数経るまゝに、姫君ただならず見えさせ給い、左仲將は嬉しく、その後も「おほろ月夜御こと葉の末もいとあわれに」思召し、文を通わす。

思ひかねひきむすひたるたまつさを／かすミの隙に君にみせはや

小宰相の局は、姫をいさめる。

——此左申しやう／とはかくれなくやさしき御人なり さのミ人の思ひ／をむなしくなし給ふ人はすゑわろし いにしへののをのゝ小町はその姿いつくしくて人／こゝろを／つくしたまふゆへ後にハさわのねせりをとりしも心／つよきゆへなり さのミ思ひをやふらすとも□／さまに御返事いたさせをハしませ

そこで、姫君も岩木ならねば、

みせはやといふ玉つきのことの葉に／しほるハかりにぬる、袖かな
以下、結びまでの本文を記す。

さるほとに御さむしよところハも、の花のさいしやう／とのにてそありける 御けつきとうりうあり／いか、せむとてまきの
はうつをしやうしていのら／せ給ふ ことの外大事にいらせ給ふつき物あり／何ものといへはひめ君をよろつのはなとも恋か
／なしミこ、ろをかよハしけるにつひニなひかせた／まハて此いゑこうはいになひき給ふ ことに御／なかくひなきよしき
、ねたく思ひてよろつ／の花のせひひめ君につきよりましにわれも／と／ねためとも此左中しやうとのハあら人かミの御て
ふ／あひにてましませハその御ちかいにて御さんのひ／もまふけ給ふ ことに「
御名をハむめつけ／ひめとそ申けり
」(十二オ)ひめ君なりやかて

〔絵 第十四図〕(十二ウ)

〔絵 第十五図〕(十三オ)

やかてほとなふわかきみてきたまふ せいもん／ほとまします 御名をは梅わか殿とそ申／けり わかきみをはかめ山
にちこになして／をき後「 〱 ほうしになし給ふ むめほうしの／きやうののとそ申けり かめ一はんのしほある／人に
ておハしける 又梅つけ姫十三と申はる／の比さんしよのからゑたとのニあわせ給ふ つほね／をこしらへて入むこニとり御
なかいとかしこく／めてたくてむめつけひめた、ならすなり給ふ／やす／とはしかミのわかきミ又たてほのひめ君／なとと
り／にさかへ給ふ 人／ニもちいられん事／なのめならず」(十三ウ)

〔絵 第十六図〕(十四オ)

されはむめつけひめもむめにも、のきやうのとの／いかなる御いわひのさしきへも又月ミはなミの御／さしきへも又ハも、し
きの御ましろいにもたくひ／なふみえさせ給ふ事めてたく侍り候なり」(十四ウ)止。

次に、画について概略説明を加える。

〔絵第一図〕 (前述)

〔絵第二図〕 築山ニ秋ノ草花。下部ニすやり霞。 (三オ)

〔絵第三図〕 姫君ノ屋形、座敷ニ女房一人、庭上ニ桜ノ木、山吹ノ官人殿ヨリノ使者、女房ニ文ヲ手渡ストコロ。上・下ニ霞。 (三ウ)

〔絵第四図〕 左下ニ、疊ノ上ニ藤波ノ藤宰相、冠・直衣スガタ、背ニ藤花ノ枝ヲ負ウ。下ニすやり霞。 (四オ)

〔絵第五図〕 右下ニ、疊ノ上ニ蓮華つゝ、じノ岩ノ房、両ノ手ニ蓮華ヲ持チテ坐ス。下ニすやり霞。 (五オ)

〔絵第六図〕 左下ニ、疊ノ上ニ虎ノ皮ヲ敷キ、直衣姿ノ椿ノ大納言、腰ニ紅ノ椿ノ花ノ枝。下方すやり霞。 (五ウ)

〔絵第七図〕 右下ニ、青柳ノ少将、敷物ニ坐ス。後部ニ青柳ノ枝、下方すやり霞。 (六ウ)

〔絵第八図〕 右下ニ、卯ノ花ノ式部允、疊ノ上ニ坐ス。後部ニ卯ノ花、下部すやり霞。 (七オ)

〔絵第九図〕 左下ニ、楓ノ蔦ノ守、背ニ紅葉セル楓ノ枝ヲ負ウ。下部すやり霞。 (七ウ)

〔絵第十図〕 右下ニ、唐崎ノ松ノ少納言、疊ノ上ニテ笏ヲ構ウルトコロ、背部ニ一本ノ松。下部すやり霞。 (八ウ)

〔絵第十一図〕 天地すやり霞、上部ニハ雲。屋形ノ内ニ姫、椽ニ女房、庭上ニ紅梅ヲ背ニ負イ、広ゲタル扇ヲ手ニ紅梅ノ左中将。 (九ウ)

〔絵第十二図〕 屋形ノ内。左中将ト姫君、女房二人、屏風ニ富士ノ絵、酒ノ用意ヲスル家臣タチ二人、椽ノ向コウノ池ニ一対ノ鴛鴦。天地トモすやり霞。 (十ウ)

〔絵第十三図〕 屋形ト庭上。内ニ几帳ノカゲニ姫君、文書キイルトコロ。椽ニ女房、庭上ニ菊ノ花、左中将ノ家臣カラ文ヲ受ケ取ル女房。天地トモすやり霞。右ノ余白ニ一首ノ和歌。

みせはやといふ玉つきのことの葉に／しほるハかりにぬる、袖かな
とかきたまへるをめのと／りて御つかひにたまひにけり (十一ウ)

〔絵第十四図〕 庭。鶏四羽。雀・鶏ノ雛ナド、下部すやり霞。右上に本文二行。「ひめ君なり やかて御名をハむめつけ／

ひめとそ申けり」(十二ウ)

〔絵第十五図〕 天地すやり霞。屋形ノ内。姫君御産ノトコロ、女房三人。椽ニ控エル手伝イノ家ノ者、鳴弦ノ家臣ナド。
(十三オ)

〔絵第十六図〕 屋形ノ内。酒宴ノ態、姫君・左中将・若君・女房タチ、椽ニモ女房タチ・家臣。庭ニ菊ノ花。天地ニすやり霞。」(十四オ)

本文に錯簡がある。十丁と十一丁とは、入れ替えるべきであろう。その方が、物語の筋がより自然になる。

本文の料紙はすべて裏打ちが施されている。松本隆信氏編「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』、昭58)にも本作は採りあげられていないので、一応、孤本としてよからうが、「さくらの姫君」の価値はそれがすべてではない。

この古奈良絵本と呼ぶべき一冊は、薄紫色の絹布を貼った帙におさめられている。帙の表には、「さく羅のひめ君／飛鳥井一位局筆」と二行に書かれており、帙をひろげてみると、内には同筆で「昭和七年初秋 古筆了任鑑」と墨書されており、それに見合う極が二通添えてある。一通は、「副簡極」で、縦凡一七・八糎、横凡二二・四糎の厚手の鳥の子紙を縦に六ツ折にした奉書紙に次のごとく記されている。

飛鳥井大納言雅親卿女／藤原一位局雅子筆／四半本繪詞壺冊／なか比の事かとよ／真蹟無疑者也／癸酉三月 古筆了任
やや大ぶりの朱の方印(二・二糎ほど)は、「筆跡關」とある。もう一通も同筆で、「飛鳥井一位局筆／繪詞四半本一冊／極」とあり、十行書きの「古筆用箋」に次のごとく記されている。

一位局

姓ハ藤原名ハ雅子

飛鳥井大納言雅親卿ノ女 性画ヲ好ミ／土佐光信ノ風ヲ學ヒ物語又ハ扇合／人物等ヲ描リ 岩屋物語画キ其詞／ヲ書ス
永正年中ノ人

二通の極ともに帙の墨書と同筆である。古筆家が近代に到っても鑑定の任に当たっていたことを知り得るとともに、ここにまた、「飛鳥井一位局筆」なるものを加え得る一点が現われたという意味で、本書の有する価値は高いものと言わねばなるまい。

歌仙絵を思わせる擬人化された花の精たちの画き様は、かの「四十二のもの諍ひ」とも趣が似通っている。「岩屋物語」の一本に、この女房が絵も詞も書いたというものがあったことは、古く平出鏗二郎氏が『近古小説解題』において、『本朝画史』の「婦人一位、飛鳥井榮雅之女也、能画、画岩屋物語事実、書其詞」の一条を引用して指摘しているが、ここには二種の「飛鳥井」殿が出てきており、これも問題であるが、詠歌や異類物という領域が、女筆にふさわしかったものか。散佚してしまった「桜梅草子」も詞は宗祇と言われていたが、これもあるいは女房の作例であつたかもしれない。白描の小絵巻を、女房が画くという伝統があつた。それでいて、紅梅ノ左中将殿の若君を梅法師と名付け、法師になした後は、梅法師の卿の君と申したとあるなど、また、亀山と瓶との秀句とか、山椒の唐枝殿にあわせたなど、極めて比興なる趣向もとられており、姫君の乳人役の小宰相の局のはたらき、その小宰相が、「人の思ひをむなしくな」す例として、老後の小町が沢の根芹を取つたことを引いたり、桃の国の宰相の御産所で姫君に「よろつの花の精」が憑いて苦しませるが、この左中将殿は、荒人神の御寵愛深き方であつたから無事御産あつたなどある情景は、然るべき典拠・本文——『玉造小町子壮衰書』のごとき、あるいは『源氏物語』葵巻のごとき——が存したであろうことと推察される。

草木の精という趣向から直ちに連想されるのは、謡曲「花軍（はないくさ）」の替間「菓争（このみあらそひ）」であるが、このような異類物がいかなる文学的基盤から産みだされてきたものか、それはともかく、この「さくらの姫君」一帖は、孤本であることに加えて、両様の極を伴っていることによって、その資料としての価値も極めて高いものと言ひ得ることは確かである。

〔二〕

本学図書館には、「住吉物語」が数点ある。即ち、近世極初期の古活字版一冊本、同写本（一冊）、近世中期写とおぼしき写本

(二冊)、それに古奈良絵本と称すべきもので二冊本と一冊本とがそれである。今回は、古奈良絵本を採りあげてみる。以下、二冊本の方を甲本、一冊本の方を乙本と呼ぶことにする。

六 住吉物語 (古奈良絵本、二冊、甲本)

縦凡一七・八糎、横凡二六・三糎、表紙紺紙、金泥にて天地に雲と霞、草花等を配す。題簽(九・〇糎×三・〇糎)朱色に金泥にて雲を描き、「春見よし上(下)」と墨書、表紙の中央上部に貼る。用紙、鳥の子紙、下巻のみ表紙の見返し(本文料紙と同じ)なく、下巻の裏表紙の見返しには、雲母を刷り込んだ料紙を用いている。上・下とも前後にあそび各一丁。一面、十五または十六行書き。丁数、上巻、三十九丁、下巻、四十丁。上巻は、住吉の尼から姫君への文で終っており、下巻の第一丁表は、住吉の尼が文の使いを前にして、姫君からの返事を読んでいる絵となっており、同一丁裏は、尼の文を承けて、「とかきてまいらせたりければひめ／君し、うすこしはる、心ちして——」から始まっている。乱丁はなく、絵の部分にだけ落丁が一ヶ所ある。即ち、下巻二十三丁裏のみ、あとかたもなくはがされている。本文は、段落が変わるごとに、改丁となっているので、比較的読み易い。しかし、それも、下冊に移ると、改行によって段落をつけることがなく、文や和歌の引用に際しても、地の文との区別を立てないようになってしまっている。本文には、ま、濁点を付すこともあり、漢字には、稀に訓みがなを付したところもある(上巻の、おや子・御めのと子・わが子・夜・霜月、下巻の、夜の中・木のま・千とり等)。誤写と気づいた場合には、その文字の左に「」を付し、右側に正しい文字を書き添えている。文の部分は本文と同じ高さから書きはじめ、長歌は一行に三句分を収める。和歌は、凡そ二字分さげて、上句・下句と二行に分けて書くのを原則とする。

絵がふんだんにあり、見開きになっているところが、上・下合わせて五例ある。即ち、上巻では、嵯峨野の子の日の小松曳の場面一例、下巻では住吉の尼の家(本文通り海の上に造りかけてある)に、尼君・姫君・侍従の三人が居るところ、しかも、これも本文通り「阿弥陀の三尊」が金泥で書かれており、次は、住吉からの文の使者が都の中納言家の館の門で、下女に文を手渡す場面、次が住吉の浜辺で中将殿を始め、三位中将は琴、藏人の少将は笛、兵衛佐は簫の笛、左衛門佐は歌をそれぞれ奏するところ、但し、絵の方は、本文通りにはなっていない。次が、大将殿が袴の腰を結う日、その若君・姫君を父の大納言殿の見参に

入れる場面の計四例。右の端には、前からの続きの詞章が三行・七行ほど割り込んであるものもあり、古奈良絵本の一つの古いかたちを留めている。画面は、すべて上部を空色、下部を白のす・や・霞で区切っており、住吉の尼の文の部分で前後に二分したかたちをとっているが、これが当初からのものであるか否かは、不明である。但し、綴じたあとの穴が見うけられるから、現装の、紫の平紐によって上下二ヶ所綴じてあるのは、後補とみられる。表紙は、上・下とも全く同じかたちであるから、当初から二冊に分けてあったと考える方が自然であろう。物語の展開に関わりなく分冊にする例は、「小野小町」（東京大学図書館蔵霞亭文庫本、三冊）など、いくらかも指摘できよう。

この二冊本には、金泥が、屏風・壁のほか女房や姫君たちの装束にも多く用いられている。概して人物が大ぶりに画かれているのも、横本の奈良絵本としての古さを示すものと考えられる。

この二冊本（甲本）は、鬱金色の蔓草文様の布を用いた帙に収められており、表紙中央上部に貼られた題簽（金箔で椽どられている）には「すみよしもの可多李」とある。そして、裏側に、「住吉物語上下二冊／後土御門院／勾當内侍筆」と書かれた奉書紙（縦凡一五・九糎、横凡七・三糎）の切紙が貼りつけてある。いつの代のものかわからぬが、後土御門院にお仕えしていた勾當内侍の筆という意味の極であろう。女房が奈良絵本や絵巻の製作に関わったことの著明な例は、さきの「さくらの姫君」に見たごとく、「飛鳥井一位局」であろうが、ここにまた、女筆の例を一ツ加えたことになる。更にこのような例を博搜すべきであろう。

本書は、近代の宮廷歌人阪正臣（一八五五―一九三二）の旧蔵書である。下巻最終丁の裏に、「明治十七年一月三崎龜之助ぬし／これを贈らる正臣」と二行に記してある。帙の題簽「すみよしもの可多李」の文字も、同人の筆と目せられる。阪正臣は、名古屋の生まれ、字は從叟。芳田小民・觀石・桃坪などの号を有し、書家としても活躍した。四十三歳の時御歌所寄人、のち主事も勤めた。書家としては、漢字は王羲之、仮名は行成を範として一家を成し、習字の教科書に揮毫した。

七 住吉物語（古奈良絵本、一冊、乙本）

縦凡一六・二糎、横凡二五・四糎、袋綴、綴じ糸白、後補、目数四。表紙濃緑金欄地に蔓草文様、題簽（縦凡一三・六糎、横凡三・三糎）の金箔紙に、「住吉物語」と墨書、見返し、黄の宣命紙、あそびなし。本文八十四丁、本文用紙、鳥の子紙。絵に落

丁が八ヶ所ある。その中、六十二丁ウと六十三丁オとは、見開きになっていたと考えられる。一面の行数不定、ゆったり書き記したところが十六行、十六行・十七行書きが多いが、一オは十八行、自由闊達なのびのびした筆蹟で、かなり速い勢いで書いたものと思われる。和歌は二行書き三行書き四行書きなどさまざまであるが、下句は行を改めて書きおこす。段落が変わるたびごとに行を改めているので、読み易い。長歌は、頭部二字分ほどさげて、一行に三句収める。但し、文に地の文を続けて書いたりしているところもある。

このような厚い奈良絵本（厚さ、凡一・六糎）は珍しいのではなからうか。原装ではないことが、本文のヤマの部分も糊で貼られていることが多く、これは用紙が二ツに分れてしまったものを、糊づけにして補装した痕跡であろうと考えられる。絵と本文とは勿論別紙で、極く狭いノリシロで貼られている。絵は、天地に空色です・や・り・霞、それに金泥で雲形を加えることもある。金泥はまた屏風などに多く用いられている。見開きの絵も、〔第一図〕をはじめとして三例、落丁の部分を加えてみると計六ツをかぞえる。人物のかたちは、そのまま、後の寛文頃につくられた一群の横本の奈良絵本にまで承けつがれている。

横本の奈良絵本もずいぶん手に触れてきたことになるが、同一作品を数種並べて較べてみたことは、今までなかったように思う。今回、「住吉物語」の二冊本（甲本）と一冊本（乙本）とを併せて検べてみることで、従来まったく心づかなかったことが、幾つかはつきりと割り出されてきた。二種の「住吉物語」を比較して、いかなることを言い得るか、本文の詞と絵とに分けて、具体的な検討を試みてみよう。

次の〔表Ⅰ〕は、本文の異同を示したものである。上段は二冊本（甲本）、下段は一冊本（乙本）を示し、甲本にのみ丁数を付した。

〔表 I〕

二冊本（甲本）	一冊本（乙本）
<p>しゆくゑん 一オ 此おさなひ物 一ウ おとりて 一ウ まゝに 四オ まさりて 四オ まいらせたまふへき 四オ まさりたまふ 四オ 候も 四ウ はんへりけり 五オ すくし 五ウ はんへりしに 五ウ はんへりけり 六オ おこたる 七オ いたす したつかへ 七オ はんへりしかバ 八オ</p>	<p>しゆくゑん 此おさないもの をとりて 一ウ ほんとに まさらせ給ひて 給ふへき まさり給ひぬ さふらふも はんへりけりとしハ すこし 侍しに 侍けり をこたる いたさす しもつかへ 侍りしかハ</p>

口入しにて 10オ
 露をもけにて 11ウ
 いとおしく 11ウ
 いとおしさに 12オ
 きゝゐたまへり 12ウ
 まことに 13オ
 御返も 13ウ
 わりなくはんへる 13ウ
 いだしたびければ 13ウ
 いとおしきさま 14ウ
 おかしく 16オ
 ひんかしおもてに 16オ
 心あると 17オ
 何心もかたるも 17オ
 いとおしなから 17オ
 すぐさん 17オ
 たまへるさまいと 21オ
 うろめたさこそ 22ウ
 たハふれたまひけるも 23オ
 まつのミとりハ 23オ

こうじゆしにて
 露おもけにて
 いとをしく
 いとをしさに
 きゝたまへり
 まこと
 御かへりも
 わりなくはんへり
 いたし給ひければ
 いとをしきさま
 おかしと
 ひかしおもてに
 心ありと
 なに心もなくかたるも
 いとをしなから
 すこさん
 たまへるやういと
 うしろめたさこそ
 たハふれ給ふも
 松のみとりの

<p>いさかへりなむ 23ウ なりなむ事の 24ウ しほるはかりにて 24ウ きこゆるさま 25オ すくなくなむ 25オ ゆかりとて 25ウ きこゆるさま 27オ いとあさからぬ 27ウ なりたまふを 31オ ほとけかみなと 32オ むくつけかりける女 33オ 事にはんへれバ 37オ きこえざらむのやま 38オ なんはんへる 39オ はんへりなからも 39ウ たてまつりしかハ 39ウ</p>	<p>いさかへりなん なりなん事の しほるハかりとて きこゆるやう すくなくなん ゆかしとて きこゆるやう なとあさからぬ なり給ひて 佛神なと 心むくつけかりける女 ことにはんへるハ たゝきこえざらん野_の山 なん侍 侍ならかも たてまつりたまひしかハ</p>
<p>下 二冊本 (甲本) はんへるに 1ウ をとるへたるに 1ウ</p>	<p>侍るに おとろへたるに</p>

上巻畢

をとろへたまふハ 1ウ
 うつふしかちにハ 2オ
 ちきりてそ 2ウ
 おもふハかり 4オ
 おもひはんへる 4オ
 物にをもひ 5ウ
 むすひたる 6オ
 しのハむ 6オ
 かきたまひたり 6オ
 もとに 6ウ
 おはしたるにこそ 6ウ
 おとらすこそなと 6ウ
 みんなミハ 8オ
 心ほそくけふりたちのほるけしき 8ウ
 ひんかしにハ 8ウ
 おほしいたすらん 10ウ
 われいかにもなりたらんにハ 10ウ
 いきてあると 11オ
 ことにつみこそ 12ウ
 になむと 13オ

おとろへたまふハ
 うつふしかちにはなと
 ちきりてか
 おもふほと
 思い侍る
 物におもひ
 むすひつけたる
 しのハん
 かき給ひけり
 もとにこそ
 おはしたるに
 おとらすなとこそ
 みなミは
 けふりたちのほるけしき
 ひかしには
 おほしいつらん
 われいかにもなりたらんには
 いきてありと
 つみふかくこそ
 なんと

ありけるを見て 13ウ
 よりは 14オ
 にこもりにこもりて 15オ
 をのくかへりて 16ウ
 そのまゝになむ 16ウ
 くすましきとて 16ウ
 なへらかなるに 17オ
 うすいろのころも 17オ
 たつたこへゆき 17オ
 みちゆく人 17ウ
 すむところ 18オ
 おもひなから 19オ
 そのをとに 19オ
 なつかしくそ 19ウ
 よりかゝりゐたまへる 21オ
 はんへるに 21オ
 いひすきひて 21オ
 はんへれとも 21オ
 もやのミス 22オ
 はんへる物を 22ウ

ありけるこれをミテ
 よりハよりハ
 にこもりて
 をのくかへりてをのくかへりて
 そのまゝになん
 ぐすましきそとて
 なめらかなるに
 うす色のきぬ
 たつた山こえゆき
 みちゆき人
 すミところ
 いひなから
 そのねに
 なつかしくて
 よりゐたまへる
 侍るに
 いひすきミテ
 侍れとも
 かやのミス
 侍る物を

見たてまつりたまひければ 23オ
 わたりにも 24オ
 つみて 24ウ
 夜ふくるに 24ウ
 ふえ 25オ
 ひんかし山に 28オ
 しての山ぢ 28オ
 つみてに 30オ
 此つみてにや 30オ
 いひいださまし 30オ
 かしつき給ふ事かきりなし 31オ
 せんつみてに 31オ
 しらせたてまつらんと 31オ
 つみてに 31オ
 ゑさせたまへるも 34オ
 あやしきおや 36オ
 めくりあひはんへれは 36オ
 ひんかし山に 36ウ
 つみてに 37オ
 よろつの人／＼の 38オ

見たてまつれば
 わたりの
 ついて
 夜ふくるほとに
 ふへ
 ひかし山に
 しての山
 ついてに
 此ついてにや
 いひいてまし
 おほしかしつき給ひけり
 せんついてに
 しらせたてまつらむと
 ついてに
 えさせ給へるも
 あやしのおや
 めくりあひ侍れハ
 ひかし山に
 ついてに
 よろつの人々

<p>ゐ中人の 38オ</p> <p>かかるさまに 38ウ</p> <p>きく人 39オ</p> <p>おとろへておとろへて 40オ」と止。</p>	<p>ゐ中の人の</p> <p>かゝるやうに</p> <p>見きく人</p> <p>おとろへて」止。</p>
--	--

次の「表Ⅱ」は、甲本・乙本の絵を対比させて説明を加えたものである。

〔表Ⅱ〕

<p>二冊本（甲本）上</p> <p>〔絵 第一図〕</p> <p>上部空色、下部白色ノすやり霞デ区切り、中納言殿ノ屋形ノ内、病ノ床ノ北ノ方、枕元ノ中納言、姫君、女房二人。屏風・几帖ナド。姫君ノ裳束ニ金泥ヲ用ウ。（二オ）</p>	<p>一冊本（乙本）</p> <p>〔絵 第一図〕</p> <p>上部分下部トモニすやり霞、左手中納言殿ノ屋形ノ内、病ノ床ノ北ノ方、枕元ニ姫君、中納言、女房三人、右手椽、庭ニ松ノ木、遣り水、ホトリニ鶯一羽。（二ウ・二オ）</p>
--	--

〔絵 第二図〕

上部空色、下部白色ノすやり霞、屋形ノ内、姫君、侍従、女房一人、障子ト姫君ノ装束トハ金泥。(三ウ)

〔絵 第三図〕

屋形ノ内、四位の少将ヨリノ文ヲヨム姫君、女房三人、姫君ノ装束、障子ナド金泥。(六ウ)

〔絵 第四図〕

屋形ノ内、屏風ノ前ニ少将殿、へはつしぐれ——」ノ歌ヲ薄様ニシタタムルトコロ、前ニ筑前。(九オ)

〔絵 第五図〕

屋形ノ内、几帳ノカゲニ琴ヲカキナラス姫君、隣室トノ境ノ障子ヲ開ケテ、侍従文ノ使イニ対ウトコロ。姫ノ装束、後部ノ襖ナド金泥ヲ用ウ。(十ウ)

〔絵 第二図〕

椽ニ向キタル一室、屏風ノ前ニ姫君、傍ニ侍従、庭ニ紅葉セル木、遣り水ニ枝垂レ柳、屏風ニ金泥ヲ用ウ。(四オ)

〔絵 第三図〕

椽ニ面シタ一室、文ヲヨム姫君タチ三人、几帖、椽ニ女房、女ノ童、庭ニ泉水、築山、紅葉。(七オ)

〔絵 第四図〕

椽ニ面シタ一室、和歌ヲシタタムル少将殿、椽ニ筑前。尾風ニ金泥ヲ用ウ。(九ウ)

〔絵 第五図〕

庭ニ向イタ一室、内ニ屏風几帖ノ前ニ姫、椽ノ戸ヲ開ケテ、筑前、侍従ニ結ビ文ヲ渡ストコロ。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(十一オ)

〔絵 第六図〕

屋形ノ内、継母、筑前ニ白キ打着ヲ与ウル
トコロ、衣裳・障子ナドニ金泥。(十四オ)

〔絵 第七図〕

少将殿ノ屋形ノ内、結ビシ文ヲ差シ出ス筑
前。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(十五ウ)

〔絵 第八図〕

少将ト三ノ君トカタラウトコロ。屏風ニ薄
墨デ竹ノ絵、向ウノ部屋ニ女房一人。三ノ
君ノ装束ニ金泥ヲ用ウ。(十六ウ)

〔絵 第九図〕

屋形ノ内、琴ヲカキナラス姫君、椽ノ御簾
ノ下デ、少将侍従ニ文ヲワタストコロ。部
屋ノ向ウニ泉水。障子ニ金泥ヲ用ウ。(十七
ウ)

〔絵 第六図〕

庭ニ面シタ一室、筑前ニ白キ打着ヲ与ウル
継母、傍ニ女房一人、奥ノ間ニモ女房一人。
(十五オ)

〔絵 第七図〕

(ナシ) (十六ウ)

〔絵 第八図〕

少将ト三ノ君トウチ臥セルトコロ。屏風、
几帳、御簾ニ格子、椽。(十八ウ)

〔絵 第九図〕

(ナシ) (二十ウ)

〔絵 第十図〕

嵯峨野ノ遊宴。姫、一ノ君、三ノ君ナド小松ヲ曳クトコロ、立テタル車三輛、女房タチ四人、女ノ童ナド。右手大ナル松ノ下ニ坐ス少将、供人三人。姫君ノ装束ニ金泥ヲ用ウ。右ノ端ニ、四行本文アリ。(二十一ウニ十二オ)

〔絵 第十一図〕

侍従ガ母ノ死期。部屋ノ内、枕元ニ、姫君ト侍従。障子ニ金泥ヲ用ウ。(二十五オ)

〔絵 第十二図〕

対ノ廊ニテハ君かあたり——」トウタイ過ギ行ク少将、ソレヲヒカエル侍従。屋形ノ中、几帳ノ向ウニ姫君。襖ニ金泥ヲ用ウ。(二十九ウ)

〔絵 第十図〕

小松ヲ曳ク姫君タチ。女房三人、車二輛立テタルトコロ、供人二人。右手松ノ大樹ノ下ニ少将扇ヲ持チテ佇ツトコロ。扇ニ金泥ヲ用ウ。(二十五ウ・二十六オ)

〔絵 第十一図〕

庭ニ面シタ屋形ノ一室、臥セル侍従ノ母。枕元ニ、姫ト侍従。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(二十九オ)

〔絵 第十二図〕

椽ヲ過ギ行ク少将、扉ヲ開ケル侍従。屋形ノ一室、几帳ノカゲニ姫君。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(三十三ウ)

〔絵 第十三図〕

笠冠リタルアヤシキ法師立チ帰ルヲ、屋形ノ御簾ノ向ウヨリ、中納言ト継母、コレヲ見ルトコロ。法師ノ顔ヲオオウ扉ト部屋ノ屏風ニ金泥ヲ用ウ。(三十二オ)

〔絵 第十四図〕

屋形ノ内、泣キ悲シム姫君ト侍従。姫君ノ装束ニ金泥ヲ用ウ。(三十六ウ)

二冊本(甲本)下

〔絵 第十五図〕

侍従ガ母ニ仕エシ女、住吉ヘ出向キ、尼ニ姫君ノ文ヲ届ケル。水ノ上ニツクリカケタ屋形ノ内。(二オ)

〔絵 第十六図〕

川尻ヲ過ギ行ク船。中ニ尼君、姫君、侍従。楫取二人。向ウニ山々。金泥ヲモツテ遠山ヲ画ク。(七ウ)

〔絵 第十三図〕

右手、屋形ノ中ヨリ中納言ト継母ト御簾ゴシニ庭ヲ見ヤルトコロ。庭上、対ノ屋ノ前ヲ一人ノ僧過ギ行クトコロ。庭ニ杉ノ木、紅葉。下部ノ空色ノすやり霞ニ金泥ノ雲形ヲ添エル。室内ノ屏風ニ金泥ヲ用ウ。(三十六ウ・三十七オ)

〔絵 第十四図〕

ナシ(四十ウ)

〔絵 第十五図〕

住吉ノ尼ニ文ヲ届ケル女。波打際ニ松ノ木。屋形ノ一室。(四十三ウ)

〔絵 第十六図〕

ナシ(五十一オ)

〔絵 第十七図〕

左手ニ、海ノ上ニツクリカケタル屋形、床ニ三尊ノ仏、尼君、姫君、侍従ノ三人。右ニ海浜、松ノ並木、間ハ海。帆カケ船二艘。
(九ウ・十オ)

〔絵 第十八図〕

左手、屋形、庭ニ面シタ部屋。門ニテ結ビ文ヲ渡ス童、受ケ取ル下女。手前ニ草。右手ニ五行本文。
(十一ウ・十二オ)

〔絵 第十九図〕

住吉ノ姫ヨリノ文ヲ読ミ、涙ニ昏ルル中納言。庭ニ面シタ屋形ノ一室。椽ニ女房。屏風ニ金泥ヲ用ウ。
(十四ウ)

〔絵 第二十図〕

泊瀬ニテ夢想ヲウクルトコロ。階ノ上ノ廊、部ノ前ニ睡眠ノ少将。ソノ前ニ立ツヤンゴトナキ女房一人。廊ノツツキニ供ノ者一人。女房ノ装束ト部ニツツク壁面ニ金泥ヲ用ウ。
(十六オ)

〔絵 第十七図〕

右手、庭ニ面シタ一室、仏ニ対ウ尼君、姫君、侍従ノ三人。庭ニ紅葉。浜辺ニ並木、沖ニ帆カケ船。島ナド。
(五十三ウ・五十四オ)

〔絵 第十八図〕

門。築地塀、文ヲ下女ニ手渡ス男。手前ニ草ナド。
(五十六オ)

〔絵 第十九図〕

庭ニ面シタ屋形ノ一室。文ヲ展ゲ見ル中納言。庭ニ紅葉。屏風ニ金泥ヲ用ウ。
(五十八ウ)

〔絵 第二十図〕

泊瀬ノ廻廊ニマドロム少将、ソノ前ニ立ツ女房一人。睡眠ノ供人二人。手前境内ノ立木、鐘縷、松ノ木ナド。女房ノ装束ニ金泥ヲ用ウ。下部ノすやり霞ニ添エテ金泥ノ雲形。
(六十オ)

〔絵 第二十一図〕

住吉ノ浜辺。少将、松葉搔キノ二人ノ童ニ
モノヲ尋ヌルトコト。供人一人。松ノ木。
(十八ウ)

〔絵 第二十二図〕

尼君ノ屋形。琴ヲカナヅル姫君、傍ニ尼君。
簀子ノ外ニ少将トソノ供人。簀子ノ内ニ侍
従。姫ノ装束、障子ナド金泥。(二十ウ)

〔絵 第二十三図〕

ナシ (二十二ウ)

〔絵 第二十四図〕

住吉ノ浜ニテ、中将ヲハジメトシテ、藏人
少将、兵衛佐、左衛門佐ナド管絃ノ態。供
人、童。右手ニ、尼君、姫君、侍従。松ノ
並木。霞ノ彼方ニ望ノ月出ヅルトコロ。太
鼓ニ金泥ヲ用ウ。(二十四ウ・二十五ウ)

〔絵 第二十一図〕

ナシ (六十二ウ)

〔絵 第二十二図〕

尼ノ屋形。部屋ノ内ニ琴ヲカキナラス姫君、
仏ニ対ウ尼君、椽ニ侍従。門ノ前ニ佇ツ中
将殿、供人。柴垣、松ノ木。(六十五ウ)

〔絵 第二十三図〕

尼君ノ屋形ノ一部。語り合ウ中将ト姫君。
庭ニ松ノ木、波打際。(六十八ウ)

〔絵 第二十四図〕

尼ノ屋形。海ニ対エル一室、中将タチ琴・
笛・簫ヲカキナラストコロ。仏前ニ尼君、
姫君、侍従。松ノ木。波打際。(七十ウ)

ナシ (七十一ウ)

〔右ニ続ク浜辺ト海トノ景ナリシカ〕

〔絵 第二十五図〕

京ノ中将殿ノ屋形ノ一室。中将、姫君、侍従ニ女房一人。三宝ニ盃、盃ノ台ナド。障子ニ金泥ヲ用ウ。(二十八ウ)

〔絵 第二十六図〕

大将殿ノ屋形ノ内。男君ノ裳着ノ祝イノトコロ。大将・大納言、姫君・若君、銚子ヲ持ツ家臣、室内ニ家臣二人。右ノ面ニ続ク廊ニ、家臣ト童。前ノ丁ヨリ本文ガ七行割リコンデイル。屏風ニ銀泥ヲ用ウ。(三十ウ・三十一ウ)

〔絵 第二十七図〕

大将殿ノ屋形ノ一室。中将・大将、姫君、家臣二人、女房二人。姫君ノ装束ニ金泥ヲ用ウ。(三十三ウ)

〔絵 第二十八図〕

大将家ノ栄華ノ態。中将、姫君、若君二人、女房達五人。几帳、御簾・蒔格子、姫君ノ装束ト屏風トニ金泥ヲ用ウ。(三十七ウ)止。

〔絵 第二十五図〕

中将殿ノ屋形。中将・姫君、椽ニ若君ヲ抱ク女房、他ニ女房一人。几帳・屏風。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(七十四ウ)

〔絵 第二十六図〕

大将殿ノ屋形、裳着ノ式ノサマ。大納言、男君、姫君、裳ヲ棒グル女房、家臣兩名、童。裳ト屏風トニ金泥ヲ用ウ。(七十八ウ)

〔絵 第二十七図〕

ナシ (八十ウ)

〔絵 第二十八図〕

大将殿ノ栄華ノテイ。中将・姫君、若君、広椽ニ女房三人。几帳。屏風ニ金泥ヲ用ウ。(八十五ウ)止。

まず、本文詞章に就いて見るに、両者は近似という以上に酷似していること一見して明らかである。助詞や副詞の用い方などに幾分かの入りがあり、甲本において「侍り」を「はんべり」と表記するなど、特徴は見られるものの、脱文のところまで一致しているのは、同じテキストを祖本として写したとしか考えようがない。細部の検討は省くが、このことは、奈良絵本の製作過程を考える上で、いろいろなことを示唆しているように思われる。

次に、絵に就いて見るに、これも、殆ど両者はそれぞれ対応する図柄になっていることがわかる。すなわち、甲本（二冊本）は計二十八図、乙本（一冊本）は、七ヶ所は破りつつた箇所、それをも含めて本来のかたちには復原してみると、計二十八図存したものと考えられる。数も同じなら、図柄も似ている。これも、本文詞章の場合と同じような理由で説明がつけられるのではない。即ち、絵を画いた人は別人であるが、画の詠えは同一のものであったのだろう。

横本のかたちをとる奈良絵本の構図には類型があり、庭に面して斜に屋形を画く図とか、吹抜屋台式に室内を斜め上部から見るとかは、よく見かける図柄である。また、同じ情景を、左右をすっかり逆勝手にしたものに出会うこともある。古い記憶であるが、大阪平野の大念仏寺で披見させていただいた二種の「片袖縁起」にもそれがあった。昨年の秋東京古典会の入札会で見た「木幡狐」の絵巻は残巻ながら珍しいもので、寛文から元禄にかけての書写と思われたが、その中の一葉に、木幡の里の稻荷社と思しき朱の鳥居の前で二匹の狐——きしゅ御前と中納言の局とが今しも人身に化ける場面があり、絵詞に、「姫様ハとこ／＼も／＼うつくしく／＼なり給ひ／＼いか成人／＼見まいらせても心／＼まよひ／＼まいらすへけれ／＼とも今すこし／＼尾がみえまいらせ候」とあってきしゅ御前は美しい女房の立姿ながら裾から狐の尾が少しのぞいているように画かれていて、さながら、「箱根権現縁起絵巻」の一場面を想起させるような画き方であり、その傍に「少納言ハ／＼いまたかほ斗／＼出きたるか」とあって、人面獸身の中納言の立姿が見られるが、これは、古奈良絵本の同じ場面を逆勝手にした構図である。即ち、岡見正雄博士蔵「こわたきつね」二本のうち、一本には、後の横本の奈良絵本よりも絵が多く、その中には、絵詞も見られる極めて古風なものであるが、その一場面は、右手に朱の玉垣を配しその左側に二人の女、尻尾を出した姫と人面獸身の中納言の局とを配した絵になっているのである。「住吉物語」の甲本と乙本とを較べてみても、いずれが本来の詠えのかたちなのかは不明ながら、逆勝手の構図が見られるのは、

それぞれの絵師の裁量に細部は委ねられた所産なのかもしれない。

一見してわかることは、乙本の画風が、普通寛文期の写と言われている奈良絵本のそれとも一致することである。もしこの乙本の寸法が一周り小さく、用紙がマニアイであったなら、寛文頃書写の、もっとも多く流布する奈良絵本、そのままかたち・が・渋川版へと承けつがれてゆくものと、見紛うほどである。但し、本文の筆致は極めて豁達、かなりのスピードで筆を馳せている趣が見てとれ、一面の行数も不定、最後まで、段落のたびに行を改めている。それに対して、甲本の方は、本文は一面十五行が原則で、さして特徴のある筆致ではなく、下冊に移ると、段落を設けるべきところも改行せずに流して書きつらねているが、絵の方は、一ツ前のかたち・を留めているように思われる。即ち、その特色として、まず人物が概して大ぶりであること、吹抜屋台にして斜め上から見おろす構図などでは、遠近法がまったく採られていないこと、さながら、「伊勢物語」(チェスタービーティライブラリー蔵本、『在外奈良絵本』参看)や、「釈尊出世本懐記」(スペンサーコレクション蔵本、同上書参看)などと近似しているのである。私は、かつて、横本の奈良絵本の新旧をかたちの上から整理してみても、甲本・乙本のごとき鳥の子紙を用いた奈良絵本をA型と呼び、やや古いかたちと見、所謂、慶長から寛永にかけての製作と見、それらに対して、やや小ぶりでマニアイ紙を用いたものをB型と呼んで、寛文頃の製作と見る意見を叙べたが(『國語と國文學』平成二年五月号、「文学と美術」——中世文学史と奈良絵本——参看)、甲本・乙本ともにA型奈良絵本の範囲に入るものながら、よほどその趣を異にすることから、更に、細かくA型のかたち——画風も、霞や雲による天地の区切り方も、金・銀泥の用い方も——を分別しなければならぬ必要性を感じる次第である。

さて、「住吉物語」の二本が、ともに祖本を同じくする事実を踏まえて、それならその詞章はいかなるものであったのかと推測するのが、本文追究の次の段階であろう。次の〔表Ⅲ〕は、奈良絵本甲本と、古活字十行本「住吉物語」(新日本古典文学大系18所収)との異同を示す表である。但し、古活字十行本の漢字には、もとの訓みが付してあり、校注者による訓みは、()で示し、濁点をも付したと、「凡例」にある。この古活字十行本は、流布本系の本文と非流布本系のそれとの混態本である。

〔表 Ⅲ〕

二冊本 上	<p>きゝて 1オ</p> <p>をもく 1ウ</p> <p>おとりてや 1ウ</p> <p>をもげなれば 2ウ</p> <p>はんへりけるほどに 2ウ</p> <p>こしらへをき 3オ</p> <p>しよ大ぶの 3オ</p> <p>わたらせたまはんとき 4ウ</p> <p>はんへれ 4ウ</p> <p>はんへりけり 5オ</p> <p>ひめきみに 5オ</p> <p>見えはんへる 5オ</p> <p>はんべらんとて 5オ</p> <p>はんへりける 5オ</p> <p>はんへりつれとも 5ウ</p> <p>はんべりしに 5ウ</p>
古活字十行本 上	<p>きこえ</p> <p>重く おも</p> <p>劣りてや せと</p> <p>おもげなれば</p> <p>過待りける程に ほど</p> <p>こしらへ置き を</p> <p>諸大夫の ふ</p> <p>わたらせ給はむ時</p> <p>侍れ はべ</p> <p>侍けり (はべり)</p> <p>年わ姫君に (はひめ)</p> <p>見え侍る</p> <p>侍らんとて (はべ)</p> <p>侍りける</p> <p>侍つれ共 (はべり) (ども)</p> <p>侍しに (はべり)</p>

はんへりけり
 はんへりければ 7オ
 おこたるとき 7オ
 いひもいたすとして 7オ
 はんへりける 7オ
 おとこにてありける 7オ
 したつかへに 7オ
 (ナシ)とものたゆふと 7ウ
 はんへりければ 7ウ
 こばき 7ウ
 せしが 7ウ
 まいりよらねは 7ウ
 見はんべらずと 7ウ
 はんへりし物 8オ
 はんへりしかバ 8オ
 はんへりし 8オ
 つたへんやと 8オ
 まいりて 8オ
 見はんべらめ 8オ
 まいりはんへるにか 9ウ

侍けり (はべり)
 侍りければ
 怠る時 きこた
 言ひも出ず (いで)
 侍ける (はべり)
 おとなになるまゝに
 下仕に (しもづかへ)
 家司にて主殿の大夫と けいし とのも たゆふ
 侍ければ (はべり)
 小萩 こ
 せしか (まあり)
 参寄らねば (まあり)
 見侍らず
 侍りし物
 侍しかば (はべり)
 侍りし
 伝へてんや つた
 参て (まあり)
 見侍らめ
 参侍にか (まありはべり)

まいらざりし 9ウ
 はんへるを 9ウ
 まいはんへるなり 9ウ
 すきこしかたの 9ウ
 はんへりなから 10オ
 ことハりと 11オ
 まいりて 11オ
 はんへりしかバ 11オ
 おりく 11オ
 候つる 11ウ
 まいらせたりとも 11ウ
 なをそ 11ウ
 たひたれバ 12オ
 もちてまいりたりければ 12オ
 いとおしさに 12オ
 たまはらん 12ウ
 はんへりけれど 13オ
 いたはれんと 13オ
 はんへらめと 13オ
 はんへれども 13ウ

参らざりし
 侍るを
 参り侍也 まい(はべるなり)
 過こし方 すぎ(かた)
 侍ながら 侍(はべり)
 理りと ことわり
 参りて 参(まゐ)
 侍しかば 侍(はべり)
 折く 折り(をりおり)
 候つる 候(さぶらひ)
 参せたり共 参(まいら)
 猶ぞ 猶(なほ)
 給たれば 給(たまひ)
 持ちて参たりければ 持(も)
 いとをしさに
 給らむ 給(たまは)
 侍けれど 侍(はべり)
 いたはれんと
 侍らめ
 侍れども

はんへる 13ウ
 いだしたびければ 13ウ
 まいりて 14ウ
 はんへれと 14ウ
 たはかられるも 15オ
 はんへらさりければ 16オ
 たはかられるを 16オ
 はんへりける 16オ
 ひんかし 16オ
 さまなれば 16ウ
 はんへる人 17オ
 いとおしなから 18オ
 なを 18オ
 かほとこそはんへれ 18ウ
 はんへりける 18ウ
 こすゑ 18ウ
 むめ 19オ
 きえなん 20オ
 まいりける 20オ
 きぬつま 20ウ

侍^(はべり)
 出し給ひければ
 参て^(まゐり)
 侍れど
 たばかられぬるも
 侍らざりければ
 たばかられぬるを
 侍ける^(はべり)
 東
 様なれば
 侍る人
 いとをしなから
 猶^(なほ)
 か程こそ侍れ
 侍ける^(はべり)
 梢
 梅
 消えなむ
 参ける^(まゐり)
 衣の樓^{きぬつま}

はんへらす 21オ
 はんへるにや 21ウ
 しはんへりつれば 21ウ
 おほえて 22オ
 いかに 22ウ
 はんへらしと 22ウ
 千代までと 23オ
 かへりなむ 24ウ
 はんへるなり 25オ
 たひたらは 25オ
 おもひで 25ウ
 かみほとけに 25ウ
 ゆかましけれども 1オ
 ゆゝしう 26オ
 きこゆるさま 26オ
 おひぬる物ハ 26オ
 すくなくなむ 26オ
 おひうはさへ 26オ
 のちハ 26ウ
 われ 27ウ

侍らず
 侍るにや
 し侍つれば
 おぼして
 何
 かひも侍らじと
 千世までと
 帰^{かへ}りなん
 侍也^{はべるなり}
 給^{たまひ}たらば
 思出^{おもひいで}
 神仏に
 行かまうけれども
 ゆかしう
 聞^{きこ}ゆる様^{やう}
 老^{おい}ぬる物は
 すくなくなん
 老^{おい}うばさへ
 後
 我^わが

とひなん 27ウ
 はんへるほとに 28オ
 はんべらんとて 28オ
 きこゆるさま 28オ
 しられはんへれ 28オ
 はんへりけめ 28オ
 いと 28ウ
 さまに 28ウ
 はんへるとて 28ウ
 いとおしくて 29ウ
 たえなんと 30オ
 たえはてん 30オ
 はんへりけり 31オ
 おもひはんへるに 31ウ
 ほとけかミなど 31オ
 はんへれども 32オ
 くわほう 32ウ
 はんへらめ 33オ
 はんへりける人 33ウ
 さひやうゑのすけにと 33ウ

とひなむ
 侍る程に
 侍らんとて
 聞こゆる様^(やう)
 知られ侍れ^(はべり)
 侍けめ
 など
 様に
 侍とて^(はべり)
 いとをしくて^(お)
 絶えなむと^(な)
 絶はてむ
 侍りけり
 おも^(はべり) 侍に
 思ひ侍に
 仏神など
 侍れ共^(ども)
 くわほう
 侍らめ
 侍ける人^(はべり)
 左兵衛の督にと^{さひやうゑ}

はんへるへし 34オ	なを 34オ	わつらひはんへるに 34ウ	はんへれども 35オ	はんへれば 35オ	おもひはんへらね 35オ	ことハリ	きこえざらむのやま 36オ	ことはりにてはんへる 36オ	はんべらん 36オ	をくれまいらせて 36ウ	はんへりけるを 36ウ	おほえさせおハしますに 36ウ	おほえはんへるなり 36ウ	事なんはんへる 37オ	はんへりながらも 37ウ
二冊本下															
はんへるに 1ウ	をとろへたるに 1ウ														
きこゆれば 2オ															

侍べし <small>(はべる)</small>	猶 <small>(なほ)</small>	わづらひ侍に <small>(はべる)</small>	侍れ共 <small>(とも)</small>	侍ば <small>(はべれ)</small>	思ひ侍らね <small>(ことわり)</small>	理 <small>(ことわり)</small>	聞えざらん野山 <small>(ことわり)</small>	理にて侍 <small>(はべり)</small>	侍らん <small>(まゐら)</small>	後れ参せて <small>(きく)</small>	侍けるを <small>(はべり)</small>	覚させおはしますにや <small>(おぼさ)</small>	おぼえ侍也 <small>(はべるなり)</small>	事なん侍 <small>(はべる)</small>	侍ながらも <small>(はべり)</small>	侍に <small>(はべる)</small>	衰へたるに <small>(おとろ)</small>	など聞こゆれば <small>(き)</small>
-----------------------------	--------------------------	--------------------------------	----------------------------	----------------------------	--------------------------------	----------------------------	----------------------------------	------------------------------	-----------------------------	------------------------------	------------------------------	------------------------------------	---------------------------------	------------------------------	-------------------------------	----------------------------	-------------------------------	-------------------------------

おもひはんへるに 2ウ
 わすれかたく 2ウ
 かやうになるほとに 2ウ
 おもひはんへれ 3オ
 たてまつりければ 3ウ
 あはれなりけめ 3ウ
 おほしけれとも 4オ
 はんへらんすらんと 4オ
 おもひはんへる 4オ
 おもひはんへらす 4オ
 おもひすてはんへる物を 5オ
 ふしたる 5オ
 (ナシ) 8オ
 (ナシ) 8オ
 みんなみ 8オ
 ひんかしにハ 8ウ
 はんへりなん 9オ
 おひうはが 9オ
 かくれはんへるへし 9オ

思ひ侍に ^(はべる) 忘 ^(わす) かたくとて かやうなる程に おもひ侍 ^(はべれ) 奉り給へと 哀也 ^(あはれなり) けむ おはしけれ共 見奉り侍らんずらん 思ひ侍る 思ひ侍らず ^{おも} 思ひ捨 ^(すて) 侍る物を 臥 ^(ふ) たるかと	古活字本 下	いとをかしき かや屋の板びさしなるが所々 南 東 侍なん ^(はべり) 老 ^(おい) うばが 隠 ^(かく) れ侍 ^(はべる) べし
--	--------	--

ミヤこの事を 10ウ

おほしいたすらんと 10ウ

われいかにも 10ウ

いきである 11オ

なりせはなされても 12ウ

ことにつミこそ 12ウ

とかきてすさみて 13オ

ありけるを見て 13ウ

かミほとけの 15オ

しらせせたまへと 15オ

こもりにこもりて 15オ

(ナシ) 15ウ

はんべるべき 16ウ

すてまいらせて 16ウ

くすましきとて 16ウ

たつたこへゆき 17オ

はんべれ 17ウ

みちゆく人 17ウ

これにはんへるなり 18オ

たゆふ殿 18オ

都の事

おほし出らん (いづ)

我がいかにも

生きて有と (あり)

なりせばなどされても

ことに罪深くこそ

と書きすさみて

ありける是を見て

神仏の

知らせさせ給へと

籠りて

おはしましどころ知らせさせ給へとたまへば

侍るべき

捨参せて (すてまらち)

具すまじきぞ

竜田山越え行き (たつたこ)

侍れ

道行人 (みち)

是に侍なり (これ) (はべる)

大夫殿 (たいふ)

はんへりき 19ウ
 はんへるになん 21オ
 心そ 21ウ
 はんへれとも 21ウ
 はんへれは 22オ
 こそよれ人 22ウ
 はんへる物を 22ウ
 はんべりつるほとに 24ウ
 かみほとけへ 24ウ
 まいりて 24ウ
 夜ふくるに 24ウ
 おもひはんへりつるほとに 26ウ
 一むらのたえまより 27オ
 おひおとろへて 28オ
 ひんかし山に 28オ
 つけてはんへりしなり 28オ
 かくてはんへるとたに 28ウ
 かみほとけにも 28ウ
 おひおとろへて 30オ
 はんへるかな 30オ

侍りき
 侍になん
 心ちぞ
 侍れども
 侍れば
 こそ上り候
 侍物を
 侍つる程に
 神仏へ
 参ては
 夜更るほどに
 思ひ侍つる程に
 一むらの霧の絶間より
 老衰へて
 東山に
 告げて侍しなり
 かくて侍とだに
 神仏にも
 老衰へて
 侍かな

いひいださましと 30オ
 なを 30オ

すくしなから 30ウ

カミほとけも 30ウ

おそろしきこそ 30ウ

はんへるへき事も 30ウ

まいりあひて 31オ

おもひはんへるに 31オ

かくも 31オ

すへきこえたり 31ウ

申候し物を 32オ

きくときく人 32ウ

さいハひある人 33ウ

めやすかりなん物を 34オ

おひのひかめ 34オ

これへと 34ウ

はんへれとも 34ウ

まいりつるなり 34ウ

はんへるを 34ウ

おひのひかめにやはんへらん 34ウ

言ひ出ましと
 猶 (なほ)

過しなから

神仏も

恐ろしきこそ

侍べき事も

参合て

思ひ侍るに

ともかくも

据へきこえたり

申候し物を

聞きと聞く人

幸ある人

目やすかりなむ物を

老のひか目

あしく候是へ

侍れ共

参つる也

侍るを

老ののひが目にや侍らん

まいりつるなり 34ウ
 めくりあひはんへれば 36オ
 はんへりつる 36ウ
 ひんかし山に 36ウ
 物まいりの 37オ
 はんへりけるをや 37オ
 ゐ中人のむすめ 38オ
 しりたまへるほとに 38オ
 はんへるへけれ 38ウ
 はんべりける 39オ
 きく人 39オ
 おとろへておとろへて 40オ
 さかへはんへり 40オ 止。

参つるなり (まゐり)
 めぐらひ侍れば (はべり)
 侍つる (はべり)
 東山に
 物参の (まゐり)
 侍けるをや (はべり)
 ゐ中の人の娘 (なか)
 知給つる程に (しりたまひ)
 侍るべけれ
 侍ける (はべり)
 見聞く人 き
 衰へて おとろ
 栄へ侍り 止。 (さかえ)

これを見ても、相違と言うべきものは、主として表記の点にあり、異文というほどのものは認められない。奈良絵本と古活字本との先後関係を推測するならば、恐らく、古活字本をもととして奈良絵本を製作したものはあるまいか。ともかく、奈良絵本の本文が、刊行時期の明らかな古活字本の本文とほぼ一致するという事実注目したいと思う。

なお、詠・えのことにつき、一言付け加えておこう。版元？が絵師に絵の構図を詠える場合、糊白や本文料紙の裏などに、二・三行簡潔な文言で指示することもあったようだ。十年以上も前のことになるが、岡見正雄博士に伴われて、赤坂にあるサントリ

―美術館へ出かけたことがあった。芹澤圭介氏の所蔵になる特別展であったが、その中に、奈良絵の貼り交ぜ屏風が一双ガラスケースの中に飾られていた。一部分は、確かに「てんじん」で、私の謂うB型の奈良絵本であったが、マニアイの本文料紙の裏に、ちょうど別紙に画かれた一面を貼り合わせる部分に近く、「ソデニ雷オチルトコロ」と書かれているのが目についた。火雷神の一場面、「北野縁起」の根本縁起以来、必ず画かれている、目に親しい情景であるが、その詠え通りの画が別の一葉に画かれているのを観たことがある。凡その指示で、あとはそれぞれの絵師の裁量に任されていたのであったろうか。

岡見博士にまつわる思い出をいま一ツ加えるならば、奈良絵本の量産ということに関して、面白い作例を見せていただいたことがある。亡くなられて数ヶ月経た或る日、遺影の前、稱名寺本堂外陣の一隅で、奥様が、「机のいちばん上にこんなものがありました」と仰有って、奈良絵本を三冊携えてこられたことがある。それらはいずれも、私のことばで言うなら紛れもないA型の奈良絵本であって、特に私が関心を抱いている「木幡狐」であった。その中の二冊は、かつて岡見博士が、『図説世界文化史大系』日本II(昭34)や『室町幕府』(日本歴史シリーズ8、昭44)に写真版で紹介されたことがあり、横本には珍しく絵詞がふんだんに添えられた珍しいもので、このような例は、私は他に「てんじん」(東京大学図書館蔵本、一冊)を知るのみであるが、細かい文字で書き込まれた会話はまさしく室町期のはなし言葉なのであるが、その時、改めて表紙に貼られた矩形の朱の題簽の仮名書きの六文字の筆致が、三葉とも全く同じなのに氣づいた。詞章の筆致や絵は、上・下二冊本と上欠一冊本とは、さながら「住吉物語」の甲本・乙本ほどの違いがある。この二種の「木幡狐」も、或は同一の絵屋で製作されたものか、同一版元?の詠えによるものなのであったろうか。

袋綴じの紙背を覗き見してみると、習作なのか下描きなのか、彩色される前の、描線だらけとしか言いようのない、奈良絵の下絵を見ることが稀にある。それは、出来あがった奈良絵からは想像も及ばぬほど丁寧に細密に画かれていて、つくり絵の手法で絵具を塗ってゆくと、極く単純な嵯峨人形か伏見人形を絵に画いたような出来上がりとなり、「稚拙」とか「古雅」とか言われるような奈良絵になるのである。

一作ずつ、一点ずつ、詞章を検討し、画面の比較を積み重ねてゆくほかはなからう。室町末期から江戸極初期にかけて、横本

の奈良絵本の成立に必要な資料にこと欠くことはない。

(28・7・91)

(國學院大學文学部教授

徳江 元正)